

メイベル・L・トッドの足跡を追って

—詩の編集と社会貢献を中心に—

梅本 順子

Junko UMEMOTO. Aspects of Mabel Loomis Todd: Editor and Public Benefactor. *Studies in International Relations* Vol. 39, No. 2. February 2019. pp. 37-45.

Mabel Loomis Todd had a varied professional life as both literary editor and public benefactor. She is best known for being the first editor of the poems of Emily Dickinson, a task made possible because of her close relationship with the poet's elder brother, Austin Dickinson. Furthermore, under Austin Dickinson's guidance, she also became an active public benefactor. An example of her progressive activism was her donation of one thousand books to help found the Esashi Library in Hokkaido after she visited the town in 1896 with her husband, David Peck Todd, the leader of the Amherst Eclipse Expedition. In her later years, she dedicated herself to the preservation of the natural beauty of Fog Island, Maine. She was an early environmentalist who bought land on the island to keep it out of the hands of developers.

In this article I will be reviewing recently published books and articles devoted to both aspects of Mabel Loomis Todd's public life.

はじめに

メイベル・ルーミス・トッド (Mabel Loomis Todd, 1856-1932、以下メイベル) に関する書籍が昨今何冊か出版されてきている。メイベルという人物の再評価の動きと考えられるだろう。メイベルは編集をはじめとして多彩な分野で活動したものの、否定的な側面が強調されてきた。しかし、最近「エミリー・ディキンソン」(Emily Elizabeth Dickinson, 1830-1886) という隠遁の詩人を世に出した、最初の編集者としてだけでなく、19世紀女性の社会参画の視点からもその行動が議論されるようになってきている。

まず初めにメイベルのエミリーとのかかわりはどうであったのか。生前のエミリーは多年にわたり引きこもっていたというが、その詩をどのようにして入手にすることになったのか。そもそも、メイベルはエミリーと直接接触过していないというのに、エミリーの詩を編集できた背景はどうなっていたのか。また、メイベルが渾身の力を傾けた詩集の編集・出版という作業が、第3巻を最後に頓挫した背景には何があったのか。

これらすべての背景にあるのが、"family feud" (一家の確執) として言及されるディキンソン一家とメイベル母子の多年にわたる確執であり、それが出版をめぐる闘争となった。しかも、母子と書いたように、メイベルの代だけで終わることなく、一人娘であるミリセント・トッド・ビンガム (Millicent Todd Bingham, 1881-1968) の代まで引き継がれたのである。ちなみにミリセントは、ハーヴァード大学の地理学の分野において博士号を最初に取得した女性だった。一方のディキンソン家でも、当主のオースティン・ディキンソン (William Austin Dickinson, 1829-95) の妻のソーザン (Susan Huntington Gilbert Dickinson, 1830-1913) が亡くなった後は、母の強い思いを受けた娘のマーサ (Martha (Mattie) Dickinson Bianchi, 1866-1943) がメイベルの思いどおりにはさせないとばかりに立ち上がった。

では、トッドとディキンソンという二つの家はどうに交わることになったのか。メイベルの人生を考えると、ディキンソン一家のそれぞれと彼女との関係が明らかにされなければならない。

メイベルは結婚後、夫デイヴィッド (David Peck Todd, 1855-1938) がアマースト大学の講師の席を得たことから、自然豊かなマサチューセッツ州アマーストにやってきた。ディキンソン家はアマースト在住の名門一族であり、先に触れたエミリーの兄にあたるオースティン・ディキンソンが当主だった。オースティンはハーヴァード大学ロースクール出身の弁護士であり、当時はアマースト大学の財務官を務めていた。

こうして、トッド家とディキンソン家との家族ぐるみの付き合いが始まる。そのようなメイベルの人生が大きく変わったのは、当主であるオースティンと恋愛関係になってからだった。町の名士としての地位にあったオースティンは、メイベルより27歳年上であり、その死までの13年間にわたりメイベルと不倫の関係を続けることになる。オースティンには妹エミリーの友人でもあった妻のスーザンとの間に、二男一女がいた。もう一方のメイベルは、夫デイヴィッドが黙認するまま、オースティンとの関係を続けた。

表面的には何もなかったかのように過ごしてきた二つの家の関係が崩壊するのは、オースティンの死後、彼の残した土地の所有権を巡って、オースティンの妹のラヴィニア (Lavinia Norcross Dickinson, 1833-99) がメイベルを相手に訴訟を起こしたことによる。オースティンから遺贈されたと思っていたメイベルは州最高裁まで争うが、敗訴が確定する。このことだけをとりえると、メイベルという人物は、評価に値するのかと疑問になるだろう。

しかし、メイベルの人生は、この問題だけで判断されるようなものではなかった。個々の活動については後に触れるが、オースティンとのかかわりが、その後のメイベルの活動の原動力となっていた。オースティンと死別してからも、メイベルは、編集者に加え、社会活動家として、その能力を発揮することになる。19世紀後半には、アメリカ女性の活動範囲は拡がりを見せており、メイベルもそのような女性の一人であった。彼女が当時の社会とどうかかわっていたかに注目すると、卓越した先見性が垣間見られる。

メイベルは、日米交流にも貢献した。アマース

ト大学の皆既日食観測隊を率いる夫デイヴィッドの二度にわたる来日 (1887と1896) に同行している。最初は福島の白河での観測に参加した。その後は夫妻で富士登山 (1887年9月) を行っており、その体験を夫妻の連名で『センチュリー誌』 (1892年8月号) に "An Ascent of Fuji the Peerless" (「比類なき富士の山」) として発表した。

二度目の観測地は、北海道の北見地方の枝幸であった。1896年6月末に来日するや、一足早く観測所開設のために北海道の枝幸に向かった夫ら一行とは別行動をとったメイベルは、友人たちと関西方面を旅行している。しかし、皆既日食観測の日 (8月9日) が近づくにつれ、天文観測にも関心があるメイベルは、単身、通訳兼ガイドの村上春太郎 (同志社、鹿児島造士館などの教員。天文学者、物理学者 1872-1947) 一人を連れて日本郵船の船で、北海道を目指した。

その船中で、ひと月あまりたっているとはいえ、1896年6月15日に起きた明治三陸大津波による災禍を目撃することになった。また訪れた北海道では、動物学者エドワード・S・モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) の依頼を受け、アイヌの儀式や生活にかかわる品々の収集のためアイヌ部落を訪問した。これらの体験を綴ったエッセイは、後に *Corona and Coronet*, 1898 (『皆既日食とコロネット号』) として出版されたのである。

本稿では、メイベル・トッドの人生を、最近出版されたメイベルに関する書籍や記事に基づき検討する。とくに詩の編集者としての活動、ならびに19世紀末の社会貢献のための活動という二つの視点から、彼女の実像に迫ることを狙いとする。さらに後者に関しては、皆既日食観測で訪れた日本でも、地域発展のために一肌脱いでいることに触れたい。

メイベルの人物像と評価をめぐって

2018年10月30日、ジュリー・ドブロウ (Julie Dobrow) による *After Emily: Two Remarkable Women and the Legacy of America's Greatest Poet*

『エミリーのあとに』という題の、メイベル母子を描いた書籍が出版された。メイベルのみならず、メイベルという強い自我と向上心の塊のような母を持ったために、はじめはためらいがあったものの、博士号まで取得した地理学の道を諦め、母の遺志をついでエミリーの詩集と関係書簡集の完成を目指した娘の姿を描いている。

この本は出版を前にしてすでに多くの書評が出ていた。一年前の2017年には、著者のドブロウが、自著の内容を紹介する記事 ("Mabel Loomis Todd; The Civic Impulses and Civic Engagement of an Accidental Activist" *Historical Journal of Massachusetts*, Vol.45(2) Summer 2017) を発表していたことが関係しているのかもしれない。この記事は、先に触れたように社会活動家としてのメイベルの人生を取り上げている。19世紀後半、アメリカといえども女性にとってはハードルが高かった事業に挑戦することにより、社会に一石を投じる活躍をした新しい女性として、メイベルを評価したものである。ドブロウ以外にも、詳細なメイベル像を提供することになった作品が20世紀末から書かれてきた。その一つに、メイベルとオースティンの交換書簡を交えて描いたポリリー・ロングワース (Polly Longworth) の *Austin and Mabel: The Amherst Affair and the Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd*, 1984 (『オースティンとメイベル—アマースタの情事と二人の愛の書簡—』) がある。この本は、メイベルの日記、およびメイベルとオースティンの往復書簡をもとに、二人の関係に迫ったものである。それだけでなく、メイベルやスーザンの出自から、すでに冒頭で触れたオースティンの残した土地を巡る裁判などに至るまでを詳細に紹介している。赤裸々な資料を背景にメイベルという新しい女性の生きざまを語るものとなっている。

もう一点が、リンダル・ゴードン (Lyndall Gordon) による、エミリー・ディキンソンをはじめとしたディキンソン、トッド両家の人物に範囲を広げた伝記 *Lives like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds*, 2010 (『弾を詰めた銃のような人生—エミリー・ディキンソン

とその一家の確執—』) である。この本のタイトルは、エミリーの詩の一節 (My life had stood— a Loaded Gun—(J754, F764))⁽¹⁾ からきている。このタイトルが示すように、常に緊張感と重苦しさが両家を苦しめた背景には、メイベルとスーザンという二人の母親世代の対立、並びにそれを娘たちが引き継いだことにあった。その対立を引き起こした要因の一つには、エミリー・ディキンソンの死後、大量に発見された詩の存在があった。

繰り返すようだが、メイベルが訴訟を機に中断しなければならなかったエミリーの詩や書簡の編集が、誰によってどのように完成を見るのかが、両家の娘たちの間で競われたのである。それぞれの娘たちが、エミリーの詩だけでなく、エミリーをはじめとした関係者の書簡や資料を引き継いでいたからである。ただし、双方、より完璧なものを出版するには相手の所有している資料を入手する必要があった。エミリーの生活はベールに包まれたままであったが、残された大量の詩は、エミリーの人生を物語るものとして後世の読者をひきつけてきたからである。それゆえ、少しでもエミリーの実態に触れようと、彼女の周辺にいた人々がその資料となるものを求めて躍起になった。物理的には近くにいながら遠いエミリーを何とか知りたかったメイベルやスーザン、そしてそれぞれの娘たちとその協力者たちの人間模様を描くことこそ、ゴードンの伝記の主題といえるだろう。

ここでカギを握るのは、とりわけ積極的に行動し自分の運命を切り開いたメイベルに他ならない。先のゴードンは、その作品 (『弾を詰めた銃のような人生』) の10章の見出しで、メイベルのことを「アマースタのマクベス夫人」 (Lady Macbeth in Amherst) と呼んでいる。まず、自我の強いメイベルの出自、ならびに彼女の成長した環境に触れたい。メイベルは、自分の家系が英国からいち早くアメリカに移民してきた伝統ある一族の一つであり、由緒正しいものとして自負するが、両親は貧しく音楽教育は受けたものの、1年で切り上げなければならなかった。少女時代からエッセイを書き、読書ノートを付け⁽²⁾、また主婦以上のものになりたいと願い、そのような自分を応援してくれる人を求めていたという⁽³⁾。両

親の反対にもかかわらずメイベルはディヴィッドと結婚するが、後に女漁りを平気とする夫のモラルの低さを知る。ディヴィッドと対照的なのが不倫相手となったオースティンであった⁽⁴⁾。

夫の赴任で、アマーストという自然が残る小さな大学町に住むことになったメイベルは、運命的な出会いをすることになった。当初メイベルは、ディキンソン夫妻の長女マーサにピアノを教えるなど、ディキンソン一家との関係は良好であった。また、長男のネッドが、自分とあまり年齢が違わないメイベルに夢中になることもあったという。オースティンの妻のスーザンやその子供たちだけでなく、オースティン一家の隣に住む未婚のオースティンの妹たち（エミリーとラヴィニア）との関係も良好であった。

オースティン一家は結婚を機に父母の家の隣に「エヴァーグリーン」と呼ばれる瀟洒な家を建てており、そこにはエマソンも滞在したという。また、オースティン兄妹の父母が住んでいた「ホームステッド」と呼ばれる家には、未婚のエミリーとラヴィニアの姉妹が住んでいた。この時エミリーは、すでに引きこもり状態であったため、メイベルが直接接触するようなことはなかったが、二階に引きこもるエミリーのためにメイベルは階下でピアノを弾き、弾き語りで歌を聴かせたり、ゼリーを作ってもっていったりしたというエピソードが残る。このエミリーこそが、詩の分野で大きな足跡を残すことになったのである。エミリーは、親しい人には詩をつけて贈り物をしたりもしていたというが、その死後まで、彼女の詩作の実態は知られることがなかった。

先に触れたドブロウが彼女の記事で強調したのは、エミリーの詩の編集者としてのメイベルではなく、19世紀後半に社会参画を果たした社会活動家としての顔であった。しかし社会活動家以外にも、メイベルは文筆活動においてすでに評価を得ていた。メイベルの娘のミリセントの *Ancestors' Brocades*, 1945 (『祖先の錦』) と題する作品からは、作家のジョージ・ワシントン・ケーブル (George Washington Cable, 1844-1925) が主宰する雑誌にメイベルがエッセイを寄稿していること、ならびにのちに触れる裁判で

はケーブル夫人が常にメイベルに付き添ったことなどが述べられている⁽⁵⁾。ロングワースもその作品中、オースティンに死なれて失意のメイベルを励ますために、赤い自転車をプレゼントしたのがケーブル自身であったことに触れている⁽⁶⁾。この辺りからは、エッセイストとしてのメイベルが作家と親しく交流していたことが伝わってくる。メイベルにとって、エミリーの詩の編集に着手できたのは、エミリーの妹のラヴィニアからまとまった量のエミリーの詩を受け取ったことがきっかけだが、メイベル自身が、それに耐えうるだけの力を養っていたともいえるだろう。

そもそも、エミリーとの関係が深いのはスーザンだった。メイベルによるエミリーの詩の編集はスーザンにとっては寝耳に水の出来事であり、それ以上に文学を愛するスーザンのプライドを深く傷つけたのである。夫を奪われることよりも大きな打撃であったかもしれない。積極的なメイベルに対し、スーザンは、性格的にはメイベルとは対照的な人物だった。しかし、文学への志はスーザンもメイベル同様に高かった。そのような二人の水面下での戦いについては、先に触れたゴードンが、それぞれの娘を含めた80年近く続く確執として描いている。ロングワースやゴードンの作品に見るスーザンのイメージは、文学を愛し、エミリーとも文学を通して交流する教養人であった。スーザンは、むしろ夫となるオースティンよりも先にエミリーと知り合い、背中を押された形でオースティンの求婚を受け入れたという。また、オースティンとの結婚を望んでいたのは、むしろスーザンの姉の方であったとロングワースは述べている⁽⁷⁾。

スーザンの文学熱の高さは、自宅の「エヴァーグリーン」を文学者の集まるサロンにして、そのマダムとしてふるまっていたことから明らかだった。そのようなスーザンにとって、メイベルは、文学という側面からも自分の居場所を奪った天敵であった。メイベルがオースティンと関係を持ったのは大胆にも、エミリーとラヴィニアの二人の妹が住む「ホームステッド」と呼ばれる家であった。兄の庇護のもとで生きるエミリーとラヴィニアは、兄とメイベルの不倫関係を黙認したのだっ

た。

いったんは、兄嫁のスーザンをエミリーの詩の編集者として選びながら、エミリーの妹のラヴィニアがメイベルに乗り換えるには、どのような背景があったのか。これについて触れておきたい。エミリーは兄より先に亡くなったが、彼女が自室に残した大量の詩（現在判明しているものは1,800に近い数になっている）は、実妹のラヴィニアから兄嫁のスーザンに手渡された。エミリーと詩のやり取りもあったうえに文学への関心が高かったのが当然のことであった。しかし二年たってもスーザンが着手しなかったということで、業を煮やしたラヴィニアがスーザンから詩を取り返し、メイベルに任せることにしたという。

このあたりのメイベルの仕事ぶりについては、娘のミリセントがその作品で母の姿を描いている。ミリセントによると、ラヴィニアは視力が衰えたということで自分の力ではどうにもならないことを知ると、エミリーの詩をどさっとメイベルのもとに持ち込んだという。エミリーは包み紙とか手紙の切れ端とかに詩を書き付けていたので清書しないと読みにくいし、ラヴィニアの手紙も句読点や接続詞に問題があるうえに、殴り書きのために読みにくい。編集は、メイベル一人が勝手にやったのではなく、生前のエミリーと文通したことがあり、文学面でメンターとして助言してきたトーマス・W・ヒギンソン(Thomas W. Higginson, 1823-1911) 牧師の協力を得たとのことである。

ミリセントは、ヒギンソンに宛てたスーザンの手紙(1890年12月)を自著の『祖先の錦』の中で引用している。この書簡の主旨は、スーザンによるエミリーの詩の編集に着手できなかった弁解である。スーザンが若いころのエミリーから受け取った手紙も含めて発表しようと思ったが、その文体が変わっていて世間の人を受け入れてくれるようなものかどうか考えると気後れしてしまったという、ラヴィニアが言うように怠慢のために編集しなかったのではないことを述べている。しかもエミリーと自分の往復書簡はドイツの著名な女流文筆家の文通(カロリーネ・フォン・ギュンデローデとベッティナー・フォン・アルニム)に優るものだと自負している。このあたりからも、

スーザンの自尊心が覗かれる⁽⁸⁾。スーザンは、自分が以前個人的に受け取ったエミリーの詩や手紙に関しては、こののち雑誌などに断片的に発表したが、エミリーの詩の多くは、メイベル編集により詩集となって日の目を見ることになるのだった。ヒギンソンのところにメイベルから詩が持ち込まれたのは、エミリーの死後三年が経過した1889年11月のことであった。

ヒギンソンという人物については、ミリセントによる次のような記述も見られる。祖父(メイベルの父)は偉大な科学者であるばかりか文学にも精通しており、ソローやホイットマンとも交流があったと述べている。その祖父がヒギンソンを評価していないので、そのようなヒギンソンの判断に任せてよいのかとも書いている⁽⁹⁾。スーザンにしる、ミリセントにしる、彼女らの文学に対するプライドが見え隠れする。また、それ以上に、エミリーの詩が、難解、かつそれまでの詩の形式を相当逸脱したものであったことが影響しているであろう。結局、メイベルは、詩全体の中から200ほどを選んでヒギンソンのもとに持ち込んだあと、よいものはA、大衆受けしないと思われるものにはB、そのほか素晴らしいかもしれないがあまりに普通とはかけ離れているものや価値がはっきりしないものについてはCに分類したとのことである⁽¹⁰⁾。

メイベルにとっては、編集という生きがいを得られたことは大きかった。ほかにも社会活動家として、女性クラブやDAR(Daughters of American Revolution, アメリカ独立革命にかかわった兵士の子孫からなる組織。歴史、教育、愛国心を重視、1890年設立)という組織に属するようになり、アマーフト支部をつくろうと活発に活動し始めていた。オースティンは、単なる不倫相手というだけではなく、メイベルという女性を高みに押しあげてくれた存在だった。オースティンがいたから、彼女はその後的人生を社会活動家として前向きに生きられたのだと、さきのドブロウは述べている⁽¹¹⁾。ドブロウはオースティンとスーザンも、アマーフトの社会的、並びに政治的な文化のリーダーとして「パワー・カップル」であったと述べている⁽¹²⁾ことからして、メイベル

の出現が、他人もうらやむアマー・スト最強のカップルの絆を破壊して、オースティンのパートナーの座を正妻から奪い取ったともいえるだろう。

そのようなメイベルにとって一つの挫折は、エミリーの詩の編集・出版とそれが中断することになった土地をめぐる裁判だった。ミリセントの『祖先の錦』は母の立場を擁護するために書き上げた作品のため、中立性という点では問題がないとは言えないが、母の仕事を引き継いだミリセントの奮闘ぶりを、ゴードンは、その『弾丸を詰めた銃のような人生』の後半で力説している。すなわち、ゴードンが描き出したものは、ディキンソンとトッドという二つの家の80年にわたる確執がもたらした不幸であり、その原因を作ったのがメイベルであったということなのである。エミリーの詩の編集を軸に、母親たちの怨念を引き継いだ両家の娘たちによっても闘いは続いた。メイベルという女性の評価とかげ離れてしまうかもしれないが、あえて言うならば、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」のように、五十代半ばでひっそりと人生を終えたエミリーは、死後にその詩の編集にかかわった女たちの人生を翻弄してゆくのがあった。

メイベルがエミリーの詩集の出版を3巻（550ほど収録）で断念しなければならなかった背景には、すでに冒頭で述べた通り、オースティンの死で、両家の間では土地をめぐる裁判が起きていたことがあげられる。メイベル側の主張は、メイベルが行ったエミリーの詩の編集という多大な尽力に対し、詩集の著作権はラヴィニアにあったことから、オースティンが土地を遺贈することで報いようとしたと主張した。しかし、結末はメイベルとオースティンの不倫関係が法廷で明らかになったうえに、メイベル側が再審でも敗れて結審するという、トッド夫妻にとっては最悪のものとなった。ラヴィニアは著作権を持ちながらも、自分の力ではどうにもならないまま、結審から二年足らずで世を去っている。

エミリーの詩の編集者以外にもメイベルは足跡を残した。ドブロウの記事のタイトルにある"accidental"という表現に着目すると、多彩なメイベルの人生が見えてくる。メイベルは、何らか

の意図をもって計画的に社会活動家になったのではない。偶然そうなったのだという意味合いである。その偶然とは、彼女の場合はオースティンとの出会いであった。出会いがなければ、彼女の人生は大学教授の妻というだけで終わってしまったかもしれないのである。これまで、とりわけ詩の編集者の側面から見てきたが、メイベルは、すでに触れた女性運動のほか、歴史や自然保護に関心を持ち、人種差別にも反対した。それらの一部が少しずつ紹介されてきている。ドブロウは、「メイベルをしてさまざまな社会活動に参加させたのは、13年にわたる不倫の予期せぬ産物」⁽¹³⁾と述べている。

ところで、夫のディヴィッドは、これまでのメイベルとオースティンの関係をどう見ていたのだろうか。ゴードンに限らず、たいいていの伝記作者がディヴィッドは妻の不倫を黙認したと述べている⁽¹⁴⁾。オースティンに認められることは、ディヴィッドのアマー・スト大学での地位の保証がともなっていた。学長のシーリーが病気でオースティンがアマー・スト大学で実質ナンバーワンの地位についた時、天文台が作られることになったということからしても、オースティンとの関係は重要だったことがわかる。

一方、メイベルは夫にも尽くした。富士登山に関する記事同様、皆既日食関係の出版は夫妻連名でなされた。*(Total Eclipse of the Sun 1894, 283)*⁽¹⁵⁾

メイベルが夫の仕事である天文学にも関心を持っていた表れと考えられるだろう。もう一例上げるならば、二回目の来日の折に、メイベルより一足先に観測地である北海道に設営のために向かった夫らの観測隊を追いかけて、日本人通訳の青年一人を頼りに旅をしている。この時の通訳の青年が天文学に詳しかったと、メイベルは "Tidal Wave"（「津波」）と題するエッセイの中で書き残している。青年の能力を試そうとして彼女が言及した英米の天文学関係の研究者の名前からは、メイベル自身も天文学の勉強をしていたこと、すなわち夫の仕事を理解しようと努力していたことがわかる⁽¹⁶⁾。あいにく1887年、1896年と日本での皆既日食の観測は、突然の天候不良のために失敗に終わってしまった。そのあたりの状況について

はエッセイに記されている⁽¹⁷⁾。

メイベルは、ヘスター・プリン、エマ・ボヴァリー、およびアンナ・カレーニナらとは違って、夫を捨てるようなことはしなかったと、ゴードンは強調する。メイベルは自分の才能を確信した野心家であったが、手段だけが足りなかった。その手段とはお金であったと述べている⁽¹⁸⁾。メイベルの野心は、オースティンから与えられたものだけに満足するのではなく、夫とともに向上しようという形でも表れている。メイベルは夫の皆既日食観測に同行し二度の来日を果たしているが、日本に限らず、夫が観測で海外に出かけるときは彼女も必ず同行していたのである。このようなメイベルの高い向上心は、53歳で脳溢血に倒れ半身が不自由になってからも、夫に付き添って海外の観測に出かけたことから明らかである。

これまで触れてきたように、メイベルとスーザンの争いは、第二世代に引き継がれた。そして第二世代のスーザンの娘マーサの死後は、その意志を継いだ親戚並びに弁護士により、メイベルの娘のミリセントの死までの数十年にわたる攻防が続いたといわれる⁽¹⁹⁾。どちらが、エミリーに関する一次資料を使用してより完成度の高い詩集、ならびにその人物像を出版できるのか。とくに中断していたエミリーの詩の公開につなげられるのかが、競われた。両家はどちらも子孫がなく、断絶するのだが、その確執は関係資料が大学に寄贈されるまで続く。結局、両家が所蔵していたエミリーに関する詩、並びに書簡などの書類全てを大学に寄贈して決着が見られた。ただしその行先は、ハーヴァード（ディキンソン側）とアマースト、並びにイエール（トッド側）というように別々の大学だった。

おわりに

すでにドブロウの記事については紹介したように、メイベルは社会全体の福祉にかかわる事業に関心を持っていた。女性の倶楽部に始まり、歴史学会やDARなどで、役員を務め、会誌に原稿を寄稿するだけでなく積極的に講演を行ってきた。また、自然保護活動にはとくに積極的で、開発業

者から自然を守るために土地を買い取った。20世紀の初頭メイベルはすでに環境保護主義者だったのである。その結果、娘のミリセントはメイベル所有のマサチューセッツのペルハムの土地はアマースト大学に、そしてメイン州の hog 島はナショナル・オーデュボン協会（自然保護協会）に寄付している。特に後者の hog 島は、樹木を伐採から防ぐために島を買いとった母の意志を継いだミリセントが、オーデュボン協会に働きかけてサマーキャンプ場となり、今日に至っている。なお、「トッド・サンクチュアリー」の名称も現存している。

そのようなメイベルの社会貢献への意欲は、日本で滞在した町との交流でも見られた。夫の皆既日食観測に伴う二度目の来日で滞在した北海道の枝幸町は、メイベルにとって大変印象深かったと思われる。すでに触れたように、トッド夫妻は帰国後、枝幸町に千冊ほどの書籍を寄贈しているのである。これをもとに北海道で初めてという図書館がオホーツク海に面したこの町に設立されたのである⁽²⁰⁾。これなど、夫妻というものの、メイベルの強い意志も働いているのではなからうか。ただ、残念なことに、昭和15年5月11日の山焼きの火が広がったことによる大火で図書館も焼失した。この火事で、トッド夫妻が寄贈したもののほとんどが失われてしまったが、唯一夫妻が揮毫した掛け軸だけは無事だった。現在この掛け軸は、枝幸町のオホーツク・ミュージアムの所蔵庫に収められており、高島孝宗館長のご厚意により見せていただくことができた。

この掛け軸に書かれているのは、エミリー・ディキンソンの詩を意識しながら夫妻が書いた詩であり、夫妻の署名（筆書き）が残っている。内容は以下のとおりである。参考までにもとになったと思われるエミリー・ディキンソンの詩を書き添える。枝幸町はオホーツク海に面しているため、日の出は海からだが、日没は陸地側のため、トッド夫妻は枝幸に合わせて書き換えていると思われる。

トッド夫妻の署名がある詩

This is the Sunrise washes

This is the shore of the crimson sea.

How it rises or whither it rushes—
These are the eastern mystery—

David P. Todd

And Mabel L. Todd

Esashi

16 August, 1896

エミリー・ディキンソンの詩の一節

(J266, F297)

This—is the land—the Sunset washes—
These—are Banks of the Yellow sea—
where it rose—or whither it rushes—
These—are the Western Mystery!

(* Jはジョンソン、Fはフランクリンの編集による詩につけられた整理番号。エミリーの詩はタイトルがないため)

その後、枝幸図書館は再建されて現在に至っている。なお、『星霜』というタイトルの枝幸町立図書館百周年記念誌が教育委員会編として2004年3月に出版されている。この中には皆既日食観測のために来日したトッド夫妻それぞれのプロフィールと図書館設立にかかわる経緯が第1章の「日食と図書館」に掲載されている。また、寄贈された書籍の目録も資料編に収められている。あいにくエミリー・ディキンソン関係のものは見当たらないが夫妻が関係した天文学関係の書籍やメイベルの自著である *Corona and Coronet* (『皆既日食とコロネット号』)、ならびに作者は不明だがコロネット号の航海日誌である *Coronet Memories* (『コロネット号の思い出』) は含まれている。

ディヴィッドにしたら観測小屋設置から皆既日食までのひと月余り、メイベルに至っては二週間あまりの滞在であったにもかかわらず、日本との絆を大切にしようとしたところに、メイベルの社会参画の一端が見えてくる。しかも、アメリカ国内に限るのではなく、異国であっても自分たちの手の届くことなら、進んで実践しようとした姿勢がうかがわれるのである。1887年と1896年と2回の来日であったが、メイベルにとって日本の印

象はことのほか強かったのではなかろうか。晩年移り住んだフロリダのココナッツ・グローヴの家を「まつば」と名付けたことから知られるのである⁽²¹⁾。本稿では、メイベルという19世紀末を逞しく生きた女性の多彩な活動を、詩の編集、ならびに社会参画という二つのカテゴリーから追った。

(註)

(1) Jはジョンソン版(1955)、Fはフランクリン版(1998)。エミリー・ディキンソンの詩はタイトルがないことから番号で整理されている。最初の一節のみ引用する。

By Emily Dickinson (F764)

My Life had stood—a Loaded Gun—
In Corners—till a Day
The Owner passed—identified—
And carried Me away—

(2) Polly Longworth, *Austin and Mabel: The Love Affair and the Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd* (Univ. of Massachusetts Press, 1984) 27.

(3) Polly Longworth, 35.

(4) Polly Longworth, 50-52. (下段の注参考)

(5) Millicent Todd Bingham, *Ancestors' Brocades* (N.Y. & London: Harper & Brothers, 1945) 328, 358. 前者にはジョージ・ワシントン・ケイブルの *Home Culture Club* という雑誌をメイベルが手伝っていたこと、後者には、裁判の折、ケイブル夫人が励ましに来てくれたとある。(1898.3.2)

(6) Polly Longworth, 400. ケイブル自身、ノーサンプトンからアマーストまでメイベルに原稿依頼のために自転車で見れたとある。

(7) Polly Longworth, 92-96.

(8) Millicent Todd Bingham, 86-87.

(9) Millicent Todd Bingham, 33-34.

(10) Millicent Todd Bingham, 34.

- (11) Julie Dobrow, "Mabel Loomis Todd: The Civic Impulses and Civic Engagement of an Accidental Activist," *Historical Journal of Massachusetts* Vol.45(2), Summer, 2017, 59-60
- (12) Julie Dobrow, 57.
- (13) Julie Dobrow, 59.
- (14) メイベルはオースティンからもらったウエディング・リングをはめていたというが、ディヴィッドと離婚はしていない。むしろ、ディヴィッドの仕事に協力してきた。ドゥブロウは、オースティンの後ろ盾でディヴィッドがアマースト大学での地位を速やかに上げていったことに触れている。Julie Dobrow, *After Emily* (NY & London, W.W. Norton & Co., 2018) 54-55, 72.
- (15) Lyndall Gordon, *Lives like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds* (Penguin, 2010) 283.
- (16) Mabel Loomis Todd, "Tidal Wave," *Corona and Coronet* (N.Y.& Boston: Houghton Mifflin, 1898) 241-53.
- (17) Mabel Loomis Todd, "The Eclipse," 318-26.
- (18) Lyndall Gordon, 284.
- (19) Lyndall Gordon, 392-94. 現在も流通しているエミリー・ディキンソンの詩のジョンソン版 (Thomas H. Jonson, *The Poems of Emily Dickinson*) が1955年に出版された。所蔵していた600ほどの詩を提供し、編集に協力したミリセントに対する謝辞は一切なかったという。スーザンの娘マーサが亡くなる時、ディキンソン家の著作権を引き継いだ遠縁の男ハンプトンとの間の協定 (1950) に基づき、トッド家出身のミリセントについては言及できなくなっていたとのことである。
- (20) 公立図書館設立の経緯は、枝幸町教育委員会編『星霜』（枝幸町立図書館百周年記念誌、2004）の1章に詳しい。
- (21) Polly Longworth, 424.

主要参考文献（メイベルについて書かれたもの）
書籍

Bingham, Millicent Todd, *Ancestors' Brocades* (NY & Boston: Harper & Brothers, 1945)

Dobrow, Julie, *After Emily: Two Remarkable Women and the Legacy of America's Greatest Poet* (NY & London: Norton & Co., 2018)

Gordon, Lyndall, *Lives like Loaded Guns: Emily Dickinson and Her Family's Feuds* (Penguin Books, 2011)

Longworth, Polly, *Austin and Mabel: The Amherst Affair and Love Letters of Austin Dickinson and Mabel Loomis Todd* (Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1984)

記事

Dobrow, Julie, "Mabel Loomis Todd: The Civic Impulses and Civic Engagement of an Accidental Activist," *Historical Journal of Massachusetts* Vol.45 (2), Summer, 2017